

2009年 3月1日

【礼拝説教】

\*レントをヨハネの手紙を読みつつ過ごす①

「いのちの言葉」

牧 師 武 田 真 治

ヨハネの手紙 1、1章 1～4節

詩 篇 119編 25～32節

1、『ゲロンディアスの夢』

今日はこの後、午後1時から、横浜より桜美林大学聖歌隊をお招きして「チャペルコンサート」を持ちます。とても楽しみにしています。聖歌隊の皆さんはこうして礼拝にも出席下さいました。そして、コンサートに残られない方々のために特別讃美として『キリストには代えられません』を献金の後に歌って頂きます。感謝です。

今日の説教は、せっかく聖歌隊の皆さんが出席下さっていますので音楽の話から始めたいと思います。

午後のコンサートのプログラムの中では、メンデルスゾーンが作曲したオラトリオ『エリヤ』から抜粋して数曲を歌ってくださることになっています。

このオラトリオという曲は、おもに聖書の物語に題材を得た宗教的合唱組曲のことを表します。

ドイツ語のオラトリオとしては『マタイ受難曲』を始めバッハがたくさん有名な曲を書いています。

英語で書かれたオラトリオはそれ程多くはありませんが、最も有名な曲は、皆様もよく知っておられるヘンデルの『メサイヤ』です。このメサイヤを含めて、英語の三大オラトリオと呼ばれているものが、今日歌って下さるメンデルスゾーンの『エリヤ』とそしてもう一つが、エルガー作曲の『ゲロンディアスの夢』という曲です。

メンデルスゾーンという名前は皆様もよく知っておられると思いますが、エルガーという作曲家については日本ではそれほど知られていないように思います。曲としても管弦楽の『威風堂々』か、チェロの曲で『愛のあいさつ』という曲などがわずかに演奏されるほどです。

でも、本国のイギリスでは大変人気のある、また重要な作曲家と見做されているようです。その証拠に、彼が作曲したオラトリオ『ゲロンディアスの夢』も毎年必ず演奏会が持たれているとのこと。

この『ゲロンディアスの夢』は、聖書そのものから題材が得られている訳ではありませんが、イギリスの神学者でもありカトリックの枢機卿でもあったジュン・ヘンリー・ニューマンの書いた幻想的な宗教詩をもとにエルガーが合唱曲としたものです。

その詩は、ゲロンディアスという名前のクリスチャンが、死を前にして恐れ、悩みながらも司祭の導きによっておだやかな死を迎えるまでの前半、その後、彼の魂が様々な悪魔の誘惑を

受けながらも、聖霊に導かれて最後に天の神様に出会うまでの2部形式になっています。エルガー自身、熱心なキリスト者であり晩年に差し掛かっていた彼がこの詩に出会い、感動をして特別な思いと信仰をもって作曲した大曲なのです。日本でももっと演奏され、高い評価を受けても良い曲ではないかと思っています。

## 2、これこそ私の最高傑作

エルガーは1900年6月にこの曲を完成させますが、その完成した時の感動を自筆の楽譜に言葉としてメモをしています。これもある詩人の詩の一節だと言われているのですが、簡単に訳してみます。

「これこそ私の最高傑作。私の人生は（今まで）まるで霧のような（形のない）ものであった。しかし、今はそうではない。ここに（この曲）私が見たもの、知ったものがある。これこそ私のすべて、あなたが記憶するだけの価値あるものにちがいない」です。

エルガーが感銘を受けた詩を作曲していく段階で、この詩を更に味わいまた格闘していくことで、自分の人生を変えてくれたように思えたその感動がそのまま表わされている言葉です。だからこそ「あなた（＝他人・聴衆）にも必ず価値のあるものになるにちがいない」と自信を持って言い切れるのです。このように言い切れるものと人生で出会えたということ自体、素晴らしいことではないでしょうか。また幸せなことだと言えます。

このエルガーが感じた感動と同じ種類の感動を持って書かれているものが実はこの『ヨハネの手紙』なのです。

## 3、私たちが聞いたもの見たもの

この手紙はこのように書き始められています。『初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち、命の言葉について』と。

エルガーはニューマンの詩をただ「読んだ」とは言っていませんでした。「ここに私が見たもの、知ったものがある」と言っています。生きる上で自分が見て来たもの、知って来たものが表れていると言っています。経験的認識と言ってもいいかもしれません。

このヨハネの手紙を書いている弟子ヨハネも、ただ聞いただけのことではないと言いたいのです。実際に『目で見たもの、よく見て、手で触れたもの』なのだと、そのように言い切れる程に深く知り、また実際に付き合い、触れ合った存在を（あなたがた＝この手紙を読む者たちに）伝えようとしているのだと。この背後にはエルガーが感じていた感動と同じ種類の熱い感動があります。私が与えられたものと出会う時に、きっと何か与えられる、通じるものがあるから、だから伝えたいのだという切なる思いが存在しているのです。

そして、それ程までにヨハネが伝えたいと思っているものが『命の言葉』です。これは、命を与えてくれる言葉・生きている言葉と考えても良いでしょう。まさに「イエス様の言葉」です。この後、5節で『わたしたちがイエスから既に聞いて、あなたがたに伝える知らせ』と言われていることから分かります。

イエス様から実際に聞き、教えられた言葉であり、それは自分の人生を良きものへと変えてくれた、まさに自分に「命」を与えてくれた言葉なのだと、自分の人生で味わいこれこそ本物

と分かった言葉だから「伝えます」ということなのです。

しかもそれだけには留まらないで、ここで実際に『見て、手で触れた』とまで言っているのですから、言葉そのものに命があるとも考えられる表現となっています。つまり、イエス様本人のことも含めて言われているとも考えられます。

イエス様こそ『命の言葉』だということは、ヨハネによる福音書一章『言葉が命になった』を思い浮かべます。それがイエス様のことだと言っているのです。

まさにこの地上に来られた「神の言葉」であるイエス様が、その生涯をかけて語られた言葉は、まさに十字架の上での死を前提として語られた、命がけの「命の言葉」であり、そして復活を通して、今も私たちに語りかけて下さっている、まさに「生きている命の言葉」そのものなのです。

この手紙を書いているヨハネはそのイエス様にじかに出会い、接して、その復活を目撃して、まさにその命に触れたという感動があったのではないのでしょうか？だからこそなんとかその「命」そのものを伝えたいと思っているのです。

そして彼にとってこの命の言葉を伝えられること自体が「喜び」であったのです。

即ち、4節で『わたしたちがこれらのことを書くのは、わたしたちの喜びが満ちあふれるようになるためです』とありますように。

ここでは、その伝えられる側の読み手の「喜び」が満ることを望んでいないのです。伝える自分たちの側の「喜び(=わたしたちの喜び)」が満たされることなのだとおっしゃっているところに、本当に彼はこのことに自ら「喜び」を感じていたのだと思います、だから「伝えたい」と切に思っているのです。

#### 4、求めれば、必ず与えられる

どうでしょうか？

一昨日、五日市家庭集会在玉垣さんのお宅で持たれました。その折にこのクリスマスに信仰告白をされた方が出席しておられて、自分がなぜクリスマスに信仰を告白できたのかというお話をして下さいました。その理由は、やはり自分の方から求めて行ったから、求めたいという思いになれたからだ、だから信仰が与えられたのだと思うというお話でした。そして、求めて行けるものがあるということはありがたいことだと言われていました。その通りだなあと共感致しました。

ただ聞くだけでなく、私たちの側から求めていけば必ず答えて下さる方がイエス様ではないかと思えます。そして、それだけでなく、触れようとすれば触れさせて下さる方でもあるのです。そうではないでしょうか？

あのイエス様の復活を信じないで「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、決して信じない」と言っていた弟子のトマスのもとに、実際に現われて下さって「あなたの指をここに当てて、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい」と言って下さったお方なのですから。

ヨハネが私たちに願っていることも同じことだと言えます。即ち、3節で『わたしたちが見、

また聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたもわたしたちとの交わりを持つようになるためです。わたしたちの交わりは、御父と御子イエス・キリストとの交わりです』と語っています。この手紙を読むことで、イエス様とのそのような「交わり」を持ってほしい、経験してほしいと願っているのです。

イエス様がトマスに「信じない者ではなく、信ずる者になりなさい」言われました。その言葉は私たちへの言葉でもあるのではないのでしょうか？

### 5、初めからあったもの

最後に、この手紙の始まりをもう一度見てください。そこには『初めからあったもの』とあります。

今まで語って来ましたが、私たちにヨハネが伝えようとしている、彼自身が『聞いたもの、目で見えたもの、手で触れたもの』は、同時に「初めからあったもの」であったとここで語っています。

これは、イエス様というお方に接し、触れて、信じた時に「ああ、これはもうずっと前からあったものだった」ということに気がついたという言葉です。だから「初めからあったもの」と記したのです。

つまり、自分がある時に「求め」を持つようになり、そしてイエス様を知り、交わり、信じるようになったというのではなくて、実はもう自分が求めるずっと前から、神様からの「導き」があり、様々なことを通して「招かれていた」ということが分かったという認識を表しています。自分はただそのことに気が付いただけであったと。

この感覚も大切な信仰の感覚ではないのでしょうか？

母親の胎内にいた時よりも前に、そのずっと先から、私たちのことを導き、愛し、育んでくださった。私たちがイエス様のことを知る前から私たちのことを知っていて下さり見守り、「生きよ」と声をかけ続けて下さっていた。そのことに気がつくことが出来る時に、「ああ信仰は一生ものである」ということが分かるのです。その時、この『初めからあった』という言葉に自分自身でも納得が行くのではないのでしょうか。

エルガーが「これこそ私が見たもの、知ったもの。自分の人生をうつろなものから変えてくれたもの」と言い得たように、私たちも誰はばかることなく、人の評価に惑わされることなく、「この信仰こそ、私の見たもの、知ったもの。私の人生の初めから存在し、そして私を支え、導いてくれたもの」と言い得る者でありたいのです。

(3月1日 礼拝説教より抜粋)